安田女子大学紀要　44，63-72　2015.

女子大学生の自立と将来適応感に母親及び父親との心理的距離が与える効果（２）

－距離の「組み合わせ」による両親への全体的心理的距離からの分析－

堂　野　恵　子

The Effects of the Psychological Distances of Both Daughter-mother and Daughter-father Relationships in Female Students and the Development of Their Autonomy in Present Life and Subjective Adjustment for Near-future Life (2): Analysis of the Combination of the Psychological Distances Toward Mother and Father

Keiko Dohno

要　　旨

本研究の目的は，前研究（堂野，2015）に続き，個性化と社会化の統合期に入る女子大学生の自立と将来適応感に，母及び父との心理的距離が与える効果を検討することであった。前研究では母・父間の差異を検討するために「親別」の分析を行ったが，現実には，娘は両者が合わさった「全体として」の心理的距離の影響を受けていることは十分考えられる。そこで本研究では，対母及び対父との心理的距離（L（近），M（中度），H（遠））の「組み合わせ」による「親全体として」の心理的距離パターン（９条件）が与える効果について検討し，併せて自立と将来適応感に関する因子別の分析も行った。主要な結果としては，母及び父との距離感が一致して「H-H」の場合は，「L-L」の場合よりも，自立，将来適応感ともに有意に高かった。つまり「親全体として」の心理的距離の効果からの検討では，前研究とは異なり，自立－親子関係論からみると「分離モデル」に与する結果となった。

キーワード：母及び父との心理的距離の「組み合わせ」，統合的モデル，分離モデル，自立，将来適応感

問 題 と 目 的

前研究（堂野，2015）でも指摘したように，成人への移行期にあって，個性化と社会化（堂野，2009）の統合期に入る「青年期後期」の女子大学生にとっては，「自己意識」の発達はとりわけ重要な意味を持つ（堂野，2014）。つまり，「今ある自分」を確認・受容して「自立的」に行動できること，またそこから数年の内に社会に独り立ちしていく存在として自己を把握し，「将来の自己」の姿を適切・肯定的にイメージし（「将来適応感」）実現への一歩をふみだすことは，この時期の適応の基本であり重要な発達課題となる。

青年の個性化の側面としての「自立」の発達については，従来から，周囲の重要な他者である大人との親密な依存的関係からの情緒的自立に関心が集まり，要因の１つとして社会化の側面としての「親子間係」，特に「心理的距離」のあり方が問題となってきた。平石（2014）も指摘するように，当初は「親からの分離」側面，つまり親に対して明確な距離をとれるようになることの重要性を指摘する研究が海外では多く（例えば，Steinberg & Silverberg, 1986），本邦の研究でも，昨今の青年期後期にある娘の母との著しい心理的距離の減少化傾向をふまえて，娘の自立の遅れや不適応の背景には母親からの分離の低さがあるとする臨床的研究が多く展開されている（例えば，信田，2008；渡邊，1997）。

上述の第１モデルが「親からの分離」側面（心理的距離：遠い）の重要性を主張するのに対し，第２モデルは「親との結合」側面（心理的距離：近い）の重要性を主張する。つまり親に対する距離の近さを，乳幼児期の基本的発達課題であってその後の人格発達においても内的作業モデルとして重要な機能を果たすとされる（Allen, 2008；Bowlby, 1969, 1973）親への「愛着」や「親密さ」といった心的機能からとらえ，これを青年後期の情緒的自立の発達要因として重視するのである。こうした研究には，海外では，分離が強く母親との距離が遠い場合には娘の自立や適応が低下するといった報告（例えば，Beyers & Goossens, 1999）がある。本邦では水本・山根（2010）が女子大学生の調査により，母との距離が遠い場合には娘の自立や現実適応は抑制され，一方距離が近い場合には，しかるべき条件の下では心理的安定化が進み，精神的自立は高まり，現実適応もよいことを見出している。

第１モデルの「分離論」と第２モデルの「結合論」との論争が展開されている中で，1980年代以降，第３モデルとして，従来対立し相容れない局面として扱われていた分離と結合の両側面を積極的に結び付け，その適切な相互作用的展開の重要性を主張する包括的な「統合論」が出現してきている。平石（2014）が指摘するように，その代表である Grotevant & Cooper（1985, 1998）は，青年の自立を巡る親との関係性については，日常展開する自己主張（自分の意見を明確に伝達）と分離（相手の意見との相違を明確に表明）を主軸とする「独自性」（従来の分離モデルにあたる），及び浸透性（相手の意見に対する応答性）と相互性（相手の意見に対する感受性と敬意）を主軸とする「結合性」（従来の結合モデルにあたる），の２つの次元から捉えられると主張している。また Allen & Hauser（1996）は，この２つの次元は親との関係性の中で同時に生起し，両者の均衡ある発達は青年期以降の適応に重要な役割を果たすとしている。

本邦においてもこの統合的モデル論に基づくいくつかの研究（例えば，平石，2007；久保田，2009；高橋，2008，2009）が行われているが，前研究（堂野，2015）の主たる目的も，この観点に立って，青年期後期の女子大学生の自立と将来への適応感に親との心理的距離が与える効果を検討することであった。その際，従来から研究の中心であった「娘－母間」の距離のみならず，母と同様に親密性の著しい増大が昨今指摘される「娘－父間」の距離の効果についても検討を行った。統合的モデルに従えば，母との関係，また父との関係どちらにおいても，それぞれ「分離」と「結合」がともにバランスよく展開すること，つまり心理的距離が遠すぎも近すぎもせず「中程度」にあることが最も効果的であろうと予測される。研究方法としては，女子大学生の「母との心理的距離」については，５因子（①「コミュニケーション」②「被サポート」③「母親への配慮」④「共行動」⑤「被世話」）からなる母子密着尺度（藤田，2003）を用いて評定し，「父との心理的距離」についても，質問項目の「母親」を「父親」に換えて評定した。娘の「自立」については，個性化と社会化（堂野，2009）の統合期に入る女子大学生の重要な発達課題と

しての「自立」（堂野，2014）の観点から，情緒的自立だけでなくそこから派生するより広範な自立を取り上げることとし，６因子（①「将来展望」②「独自性」③「自立の認識」④「対人協調」⑤「感情統制」⑥「影響の受けやすさ」）からなる自立性尺度（菱田・加藤・金子，2009）を用いて評定した。また「将来適応感」については，４因子（①「居心地の良さの感覚」②「課題･目的の存在」③「被信頼･受容感」④「劣等感の無さ」）からなる青年用適応感尺度（大久保，2005）を用いて，「大学卒業後の近い将来の自分」について評定した。主要な結果としては，対母の場合も，また対父の場合も，心理的距離が「M（中度）」の場合ではなくむしろ「L（近）」の場合に，「H（遠）」の場合に比べて有意に高い自立や近い将来への適応感がそれぞれ見出された。この結果は，青年後期の自立を進める要因としての心理的距離の効果に関するモデル論としては，「統合論」よりも「結合論」（例えば，Beyers & Goossens, 1999 ; Bowlby, 1969, 1973；水本・山根，2010）に与するものとなっていた。

ところで前研究では，上記のように，心理的距離が与える効果性に娘－母間と娘－父間で差異がないかについても問題にするため，「母，父別」に分析を行なった。しかし現実には，娘は両者が合わさった「全体として」の親子関係の影響を受けていることは十分考えられる。そこで本研究では，各調査対象者について，母との心理的距離（L（近），M（中度），H（遠））及び父との心理的距離（L（近），M（中度），H（遠））との「組み合わせ」による「親全体として」の心理的距離パターン（９条件；「L-L」，「M-M」，「H-H」，「M-H」，「L-M」，「L-H」，「M-L」，「H-L」，「H-M」）を改めて査定し，この違いが女子大学生の自立と将来適応感に与える効果について，以下の検討１～５を行うことを目的とした。

【検討１】心理的距離パターン９条件中，女子大学生の自立と将来適応感に最も高い効果性をもつ条件はどれかを検討する。

【検討２】心理的距離パターン９条件はさらに，対母と対父との心理的距離が一致する条件と，不一致な条件とに大別される。「一致条件」には，対母及び対父共に「近い」と感じている「L-L」，共に「遠い」と感じている「H-H」，共に「中度」と感じている「M-M」の３条件がある。これらは一致しているがゆえに「親全体として」の心理的距離の傾向性は明瞭であり，自立と将来適応感に与える効果は，青年の自立－親子関係に関する代表的モデル（平石，2014）の「統合論」からは M-M が，「結合論」からは L-L が，「分離論」からは H-H が，それぞれ最も高くなると予測される。この検討を行う。

【検討３】「不一致条件」には，母への心理的距離が父への心理的距離よりも近い「母近条件」（３条件；M-H，L-M，L-H）と，逆である「父近条件」（３条件；M-L，H-L，H-M）がある。ところで従来，娘－母間の強い結びつきから娘に与える影響性は娘－母関係の方が娘－父関係よりも強いとされてきたが，父についても友達親子化現象など娘との間の親密性の増大が指摘される昨今，娘の自立や将来適応感に与える効果には差異がない可能性も考えられる。これについて，「母近条件」と「父近条件」の比較から検討する。

【検討４】母と父との心理的距離が不一致な場合には，両者が一致している場合，つまり「親全体として」の心理的距離の傾向性が明瞭な場合に匹敵する効果は，みられないのであろうか。これを自立と将来適応感について，一致３条件（L-L，M-M，H-H）と不一致２条件（母近，父近）の比較から検討する。

【検討５】併せて，前研究では未検討であった自立と将来適応感に関する「因子別分析」もそれ

ぞれ行う。つまり上記「検討１～４」で予測した傾向が，自立に関する６因子，及び将来適応感に関する４因子のどの因子で顕著なのかについても明らかにする。このため，検討５は検討１～４の各々で行う。

方　　法

１．調査対象：女子大学生74名。

２．調査時期：2012年6月

３．調査内容：

（１）女子大学生の娘－母間，及び娘－父間の心理的距離

日常生活における娘－母間の心理的距離を査定するために，「母子密着尺度」（藤田，2003）32項目について，大学生用としては不向きな２項目を削除した30項目を用い，「全然そうは思わない」から「大変そう思う」までの６件法で評定を求めた。娘－父間の心理的距離についても，質問項目の「母親」を「父親」に換えたものを用い，同様に６件法で評定を求めた。

（２）女子大学生の自立

青年の自立を広範囲に査定する自立性尺度（菱田ら，2009）27項目を用い，現在の自分について，「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの５件法で評定を求めた。

（３）女子大学生の将来適応感

青年用適応感尺度（大久保，2005）の30項目について，自分の近い将来への適応感を測るものとしては不向きな１項目を削除した29項目を用い，「“卒業後，近い将来の自分”は以下の質問にどのくらい当てはまると思うか」と教示して，「全く当てはまらない」から「非常によく当てはまる」までの４件法で評定を求めた。

結 果 と 考 察

１．母及び父との心理的距離の「組み合わせ」による「親全体として」の心理的距離パターンの査定と，自立と将来適応感の全体傾向

（１）母及び父との心理的距離の組み合わせによる「親全体として」の心理的距離パターンの査定と群設定

各調査対象者について，対母及び対父への「心理的距離（密着度）」に関する質問項目への回答結果に基づき，距離を大（遠い）と思うほど得点が大となるように得点化（１～６点）し，母との心理的距離，及び父との心理的距離をそれぞれ算出した。これらに基づく調査対象者の全体平均と*SD*から，平均±0.5*SD*を基準に，各自の母との心理的距離 L（近），M（中度），H（遠），及び父との心理的距離 L（近），M（中度），H（遠）をそれぞれ判定し，両者の「組み合わせ」から，各自の「親全体として」の心理的距離パターンを査定した。これにより，９条件群（「L-L」13名，「M-M」５名，「H-H」17名，「M-H」４名，「L-M」８名，「L-H」７名，「M-L」８名，「H-L」８名，「H-M」４名）が設定された。「組み合わせ」を行ったため，群によっては分析対象数が少ないものもあったが，これらはいずれも対母または対父との心理的距離としてはMが絡む条件であり，検討１，検討２を行う上では欠くことができないと考えてそのまま分析に用いた。

（２）自立と将来適応感の全体傾向

各調査対象者について，「自立」に関する質問項目への回答結果に基づき，自立しているほど得点が大となるように得点化（１～５点）した。これを６つの因子別に集計した平均（因子別自立得点），さらに６因子をまとめた全体の平均（自立得点）を算出した。調査対象者全体の自立得点の平均は3.33（*SD*：0.25）で理論的な平均3.0とほぼ等しいことからは，本研究からみた女子大学生の自立の傾向は中度といえる。

各調査対象者について，「将来適応感」に関する質問項目への回答結果に基づき，適応状態を予期しているほど得点が大となるように得点化（１～４点）した。これを４つの因子別に集計した平均（因子別将来適応感得点），さらに４因子をまとめた全体の平均（将来適応感得点）を算出した。調査対象者全体の将来適応感得点の平均は2.76（*SD*：0.24）で理論的な平均2.5とほぼ等しいことからは，本研究からみた女子大学生の将来への適応感の傾向は中度といえる。

２．母及び父との心理的距離の「組み合わせ」による「親全体として」の心理的距離パターンが自立と将来適応感に与える効果

女子大学生の「自立」に，「親全体として」の心理的距離パターン（９条件）が与える効果を検討するために，L-L ～ H-Mまでの条件別に，６つの因子別自立得点，さらに因子全体をまとめた自立得点を算出した。これをFigure 1に示す。「将来適応感」についても同様に，L-L ～ H-Mまでの条件別に，４つの因子別将来適応感得点，さらに因子全体をまとめた将来適応感得点を算出した。これをFigure 2に示す。

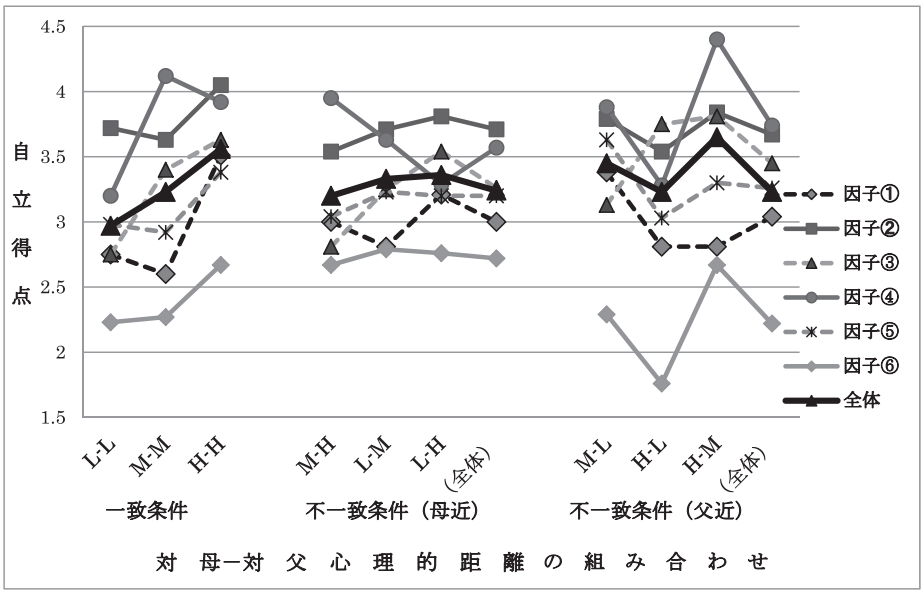

Figure 1　母及び父との心理的距離の組み合わせからみた女子大学生の自立

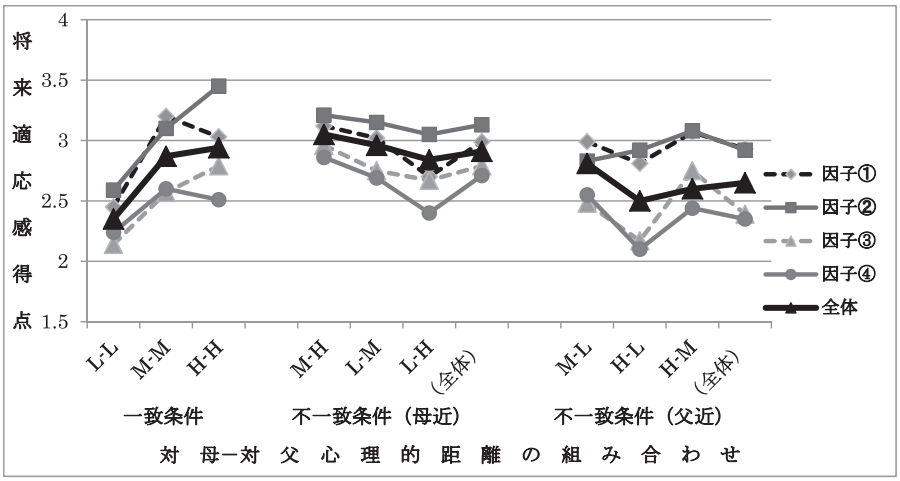

Figure 2　母及び父との心理的距離の組み合わせからみた女子大学生の将来適応感

【検討１】：心理的距離パターン９条件中「自立」と「将来適応感」に最も高い効果性をもつ条件

心理的距離パターン９条件中「自立」に最も高い効果性をもつ条件を確かめるために，Figure 1の自立得点について，パターン条件（L-L ～ H-M）×因子（①～⑥）の９×６の２要因分散分析を行った。その結果パターン条件の主効果は有意でなく，心理的距離パターン中，自立にどの条件が最も高い効果性をもつかについては確かめることができなかった。因子の主効果は有意（F（5,325）= 34.918, p<.001）であり，多重比較の結果，因子④と②はともに因子③，⑤，①，⑥に比べて，また因子③と⑤はともに⑥に比べて，因子③は①に比べて，さらに因子①は⑥に比べて，それぞれ得点が有意に高くなっていた。因子別自立得点の理論的な平均が3.0であることから，因子④の「対人協調」と②の「独自性」については自立の程度がかなり高く，因子③の「自立の認識」と⑤の「感情統制」及び①の「将来展望」は中程度，一方因子⑥の「影響の受けやすさ」については自立がやや低目であることが分かった。現代の女子大学生の自立の姿として，自分らしさ・独自性を持ちつつ対人面では協調的に適切に振る舞える，その一方で周囲の人に流され易い側面もあることがうかがえたといえよう。なお，パターン条件と因子の両要因の交互作用は有意でなかった。

心理的距離パターン９条件中「将来適応感」に最も高い効果性をもつ条件を確かめるために，Figure 2の将来適応感得点について，パターン条件（L-L ～ H-M）×因子（①～④）の９×４の２要因分散分析を行った。その結果パターン条件の主効果は有意でなく，心理的距離パターン中，将来適応感にどの条件が最も高い効果性をもつかについては確かめることができなかった。因子の主効果は有意（F（3,195）= 31.96, p<.001）であり，多重比較の結果，因子②と①はともに，因子③及び④に比べてそれぞれ有意に得点が高くなっていた。因子別将来適応感得点の理論的な平均が2.5であることから，現代の女子大学生は，因子②の「課題・目的の存在」と①の「居心地の良さの感覚」については近い将来の適応感はある程度高く，因子③の「被信頼・受容感」と④の「劣等感の無さ」については中程度であることが分かった。なお，パターン条件と因子の両要因の交互作用は有意でなかった。

【検討２】：心理的距離パターンの一致条件中「自立」・「将来適応感」に最も高い効果性をもつ条件（青年の自立－親子関係に関する代表的モデルの検討）

心理的距離パターンの一致３条件中最も「自立」に効果性が高い条件を確かめるために，Figure 1の自立得点について，一致条件（L-L，M-M，H-H）×因子（①～⑥）の３×６の２要因分散分析を行った。その結果，一致条件の主効果は有意傾向（F（2,32）= 2.52, p<.10）であり，下位検定の結果 L-L は M-M 及び H-H より有意に低い傾向があった。因子の主効果は有意（F（5,160）=17.70, p<.001）であり，多重比較の結果【検討１】と同様な有意差が見出された。なお，一致条件と因子の両要因の交互作用は有意でなかった。

心理的距離パターンの一致３条件中最も「将来適応感」に効果性が高い条件を確かめるために，Figure 2の将来適応感得点について，一致条件（L-L，M-M，H-H）×因子（①～④）の３×４の２要因分散分析を行った。その結果，心理的距離パターンの主効果は有意（F（2,32）= 5.37, p<.01）であり，多重比較の結果 L-L は M-M 及び H-H より有意に低かった。因子の主効果も有意（F（3,96）= 17.24, p<.001）であり，多重比較の結果【検討１】と同様な有意差が見出された。なお一致条件と因子の両要因の交互作用は有意でなかった。

以上，自立と将来適応感ともに，L-L は M-M 及び H-H より，有意に低い傾向，もしくは有意に低いという結果が得られた。前研究（堂野，2015）の親別の分析では，自立と将来適応感は，母においても父においてもそれぞれ心理的距離が「L」の場合に有意に高くなっており，青年の自立－親子関係に関する代表的モデル（平石, 2014）からみると,「統合論」（例えば, Allen & Hauser, 1996；Grotevant & Cooper, 1985, 1998；平石，2007；久保田，2009；高橋，2008, 2009）ではなく,「結合論」（例えば，Beyers & Goossens, 1999；Bowlby, 1969, 1973；水本・山根，2010）に与する結果であった。しかし本研究の母と父との心理的距離の組み合わせによる「親全体として」の距離の効果からの検討では，むしろ「L-L」の場合には他の２条件より有意に低くなっていた。換言すれば H-H は有意に高い結果であり，これは結合論よりも「分離論」（例えば，信田，2008；Steinberg & Silverberg, 1986；渡邊，1997）に与する結果となっていたといえよう。親との「個別」の関係性では，それぞれ心理的距離が近い方が娘にとって結合感からくる情緒的安定感は得られやすく，自立と将来適応感にポジテイブな効果をもたらしやすい。しかし，両者が組み合わさった「全体として」の関係性となると，L-L という両親の圧倒的な近さ・自己との結合感は，個性化と社会化（堂野，2009）の統合期に入る青年後期の娘にとってはかえって重苦しく，自己の行動・自立を妨げる存在として感じられやすいのかもしれない。その不安定感が自立と将来適応感にネガテイブな効果をもたらす，つまり前研究と本研究の結果の違いにつながったのではないかと考える。なお M-M も H-H と有意差が無く高めであり，これは「統合論」に与する結果ともいえるが，今回の M-M 群の分析対象数が少数であったことを勘案すると，結論は今後調査対象者を増やしての再検討を待つべきものと考える。

【検討３】：心理的距離パターンの不一致条件としての母近条件と父近条件に関する効果性の比較

不一致条件は，母への心理的距離の方が父への心理的距離よりも近い「母近条件」（M-H, L-M，L-H；計19名）と，逆である「父近条件」（M-L，H-L，H-M；計20名）とに大別される。自立と将来適応感ともに,「母近条件」の上記３条件間，及び「父近条件」の上記３条件間に有意差がみられないことから，まとめて母近条件，または父近条件（Figure 1，Figure 2では，各条件でともに「全体」として図示）として比較した。

Figure 1の自立得点について，心理的距離パターンの不一致条件（母近，父近）×因子（①～

⑥）の２×６の２要因分散分析を行った。その結果，不一致条件の主効果は有意でなく，母近条件と父近条件で効果性には差異が見られなかった。因子の主効果は有意（F（5,185）= 20.82, p<.001）であり，多重比較の結果【検討１】と同様な有意差が見出された。なお，不一致条件と因子の両要因の交互作用は有意でなかった。

Figure 2の将来適応感得点について，心理的距離パターンの不一致条件（母近，父近）×因子（①～④）の２×４の２要因分散分析を行った。その結果，心理的距離パターンの主効果は有意傾向（F（1,37）= 3.66, p<.10）であり，母近条件の方が父近条件より高い傾向を示した。つまり，母と父に対する心理的距離が不一致な場合は，母への心理的距離が父へのそれよりも近い場合の方がその逆の場合に比べて娘の将来適応感がよいことになり，自立と違い将来適応感では母との結合の効果性が示唆された。つまり，「従来，娘－母間の強い結びつきから娘に与える影響性は娘－母関係の方が娘－父関係よりも強いとされてきたが，父についても娘との間の親密性の増大が指摘される昨今，両者の効果性には差異がみられないのではないか」との当初の予測は，自立については確かめられたが，将来適応感については確かめられなかった。女子大学生にとって自立はある程度確立されているので不安定要素は少ないことから，母と父に対する心理的距離が不一致な場合にもどちらがより距離が近いかと言う結合性の効果は現れにくい。しかし将来適応感はこれから達成に向け進んでいく課題であり，まだ不安定要素も大きいことから，母と父に対する心理的距離が不一致な場合には，従来娘に与える影響性が強いとされてきた娘－母間の結合性の効果の方が表れやすかったと考える。因子の主効果も有意（F（3,111）= 20.76, p<.001）であり，多重比較の結果【検討１】と同様な有意差が見出された。なお，不一致条件と因子の両要因の交互作用は有意でなかった。

【検討４】：一致３条件に匹敵する効果性を持つ不一致条件

女子大学生の自立と将来適応感について，母と父に対する心理的距離が不一致な場合には，両者が一致している場合，つまり「親全体として」の心理的距離の傾向性が明瞭である場合に，匹敵するような効果性はみられないのかに関して検討した。まず，Figure 1の自立得点について，心理的距離パターン（一致条件（L-L，M-M，H-H）と不一致条件（母近，父近））×因子（①～⑥）の５×６の２要因分散分析を行った。その結果，心理的距離パターンの主効果は有意傾向（F（4,69）= 2.06, p<.10）であり，多重比較の結果，H-H 及び母近条件は L-L より有意に高い傾向がみられた。因子の主効果は有意（F（5,345）= 34.91, p<.001）であり，多重比較の結果【検討１】と同様な有意差が見出された。なお，パターンと因子の両要因の交互作用は有意でなかった。

Figure 2の将来適応感得点について，心理的距離パターン（一致条件（L-L，M-M，H-H）と不一致条件（母近，父近））×因子（①～④）の５×４の２要因分散分析を行った。その結果，心理的距離パターンの主効果は有意（F（4,69）= 3.68, p<.01）であり，多重比較の結果 H-H 及び母近条件は L-L より有意に高かった。因子の主効果も有意（F（3,207）= 32.86, p<.001）であり，多重比較の結果【検討１】と同様な有意差が見出された。なお，パターンと因子の両要因の交互作用は有意でなかった。

上記のように，自立，将来適応感ともに，「H-H」及び「母近」条件は「L-L」より有意に高い傾向，もしくは有意に高いという結果が得られた。つまり，対母と対父に対する心理的距離が不一致な場合でも母近条件であれば，両者の心理的距離の傾向性が距離を置く方向で明瞭に一致してしかも自立と将来適応感ともに高い H-H に，匹敵する効果性が認められた。言葉を換えれば

自立と将来適応感ともに，効果性が高いのは対母と対父ともに距離を置く H-H，及び母とは父よりも近い距離感にある母近条件であり，一方効果性が最も低いのは心理的距離が対母対父ともに一致して近い L-L であった。ここでも，青年の自立－親子関係に関する代表的モデル（平石，2014）からみると，【検討２】と同様，結合論よりも「分離論」（例えば，信田，2008；Steinberg & Silverberg, 1986；渡邊，1997）に与する結果が示されたといえよう。

以上本研究では，個性化と社会化の統合期に入る女子大学生の自立と近い将来の適応感に，母及び父との心理的距離が与える効果について，娘は両者が合わさった「全体として」の心理的距離の影響を受けていることは十分考えられることから，前研究（堂野，2015）の「親別」分析に換えて，対母及び対父との心理的距離（L（近），M（中度），H（遠））の「組み合わせ」による「親全体として」の心理的距離パターンの効果について検討した。その結果，自立，将来適応感ともに，母及び父との距離感が一致して「H-H」の場合は，「L-L」の場合よりも有意に高く（【検討２】），また不一致な場合でも「母近」条件では，L-L より有意に高く H-H の場合に匹敵する効果性が認められた。つまり，効果性が高いのは対母，対父ともに一致して距離を置く H-H，及び母とは父よりも近い距離感にある母近条件であり，一方効果性が最も低いのは心理的距離が一致して近い L-L であった（【検討４】）。以上の２つの結果は，青年の自立－親子関係に関する代表的モデル（平石，2014）からみると，前研究とは異なり，「分離モデル」に与するものとなっていたといえる。さらに本研究では，母及び父との心理的距離が与える効果について，前研究では未検討であった自立と将来適応感に関する因子別の分析も行った。その結果【検討１】～【検討４】のいずれにおいても，自立と将来適応感ともに因子の主効果は有意で多重比較の結果は同じ傾向を示したが，心理的距離パターンとの交互作用はみられなかった。つまり現代の女子大学生は，心理的距離パターンの如何を問わず，自立の傾向としては，「対人協調」と「独自性」の側面はかなり高く，「自立の認識」，「感情統制」及び「将来展望」の側面は中度，一方「影響の受けやすさ」の側面はやや低いことが示唆された。将来適応感の傾向としては，「課題・目的の存在」と「居心地の良さの感覚」の側面はある程度高く，「被信頼・受容感」と「劣等感の無さ」の側面は中度であることが示唆された。

（付記）
本論文は，筆者の指導による平成24年度安田女子大学文学部心理学科卒業研究（中野，2013）の調査資料の一部を用いて，女子大学生の自立と将来適応感に与える母と父への心理的距離の効果について，生涯発達における「個性化と社会化」（堂野，2009，2014）の視点，新たに導入した心理的距離の「組み合わせ」効果の視点，及び青年の自立－心理的距離に関する代表的モデル論の視点に基づき，問題・目的の大幅な拡充と新たな分析に基づき執筆したものである。資料の利用に快く応じてくれた中野あずささんに御礼申します。

引　用　文　献

Allen, J.P. (2008). The attachment system in adolescence. In J. Cassidy & P.R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment theory and research* (2nd ed.), pp. 419-435. New York: Guilford Press.
Allen, J.P., & Hauser, S.T. (1996). Autonomy and relatedness in adolescent-family interactions as predictors

of young adults' states of mind regarding attachment. *Development and Psychopathology*, **8**, 793-809.
Beyers,W., & Goossens, L. (1999). Emotional autonomy, psychosocial adjustment and parenting : Interactions, moderating and mediating effects. *Journal of Adolescence*, **22**, 753-769.
Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss : vol.1. Attachment.* London : Hogarth Press.
Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss : vol.2. Separation : Anxiety and anger.* London : Hogarth Press.
堂野恵子（2009）．知的発達と思考・記憶 堂野佐俊・堂野恵子 発達理解の心理学 pp. 93-123 おうふう.
堂野恵子（2014）．絵本読み体験が女子大学生の自己肯定感の変化に及ぼす効果（1）－自己肯定感尺度からの分析－ 安田女子大学大学院文学研究科紀要, **19**,（57）21-（57）36.
堂野恵子（2015）．女子大学生の自立と将来適応感に母親及び父親との心理的距離が与える効果 安田女子大学紀要, **43**, 57-65.
藤田達雄（2003）．思秋期前の妻の孤独感と母子密着に関する研究 名古屋短期大学研究紀要, **41**, 75-87.
Grotevant, H.D., & Cooper, C.R. (1985). Patterns of interaction in family relationships and the development of identity exploration in adolescence. *Child Development*, **56**, 415-428.
Grotevant, H.D., & Cooper, C.R. (1998). Individuality and connectedness in adolescent development : Review and prospects for research on identity, relationships, and context. In E. Skoe & A. von der Lippe (Eds.), *Personality development in adolescence : A cross national and life span perspective*, pp. 3-37. London : Routledge & Kagan Paul.
平石賢二（2007）．青年期の親子間コミュニケーション ナカニシヤ出版.
平石賢二（2014）．親子関係 後藤宗理・二宮克美・高木秀明・大野 久・白井利明・平石賢二・佐藤有耕・若松養亮（編） 新・青年心理学ハンドブック pp. 304-314 福村出版.
菱田陽子・加藤礼子・金子劭榮（2009）．現代青年の自立性に関する研究－自立性尺度作成の試み－ 北陸学院大学・北陸学院短期大学部研究紀要, **2**, 157-168.
久保田桂子（2009）．青年期の母娘関係の発達差：会話分析による青年期前期と後期の交流の比較 心理学研究, **79**, 530-535.
水本深喜・山根律子（2010）．青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味：精神的自立・精神的適応との関連性から 発達心理学研究, **21**, 254-265.
中野あずさ（2013）．女子大学生の自立と適応に母親及び父親との距離感が与える効果－質問紙調査＋イメージ画からの検討－ 平成24年度安田女子大学文学部心理学科卒業論文.
大久保智生（2005）．青年の学校への適応感とその規定要因－青年用適応感尺度の作成と学校別の検討－ 教育心理学研究, **53**, 307-319.
信田さよ子（2008）．母が重くてたまらない：墓守娘の嘆き 東京：春秋社.
Steinberg, L., & Silverberg, S.B. (1986). The vicissitudes of autonomy in early adolescence. *Child Development*, **57**, 841-851.
高橋 彩（2008）．男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, **16**, 159-170.
高橋 彩（2009）．女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, **17**, 208-219.
渡邊恵子（1997）．青年期から成人期にわたる父母との心理的関係 母子研究, **18**, 23-31.

〔2015. 6. 25 受理〕